

## グループ内の力関係と話題提起について

ー場面による負荷が教室内会話にどのような影響を与えるかー

小笠 恵美子

### 1. 研究目的

話者が互いを尊重する上で、互いへの配慮の重みを明らかにするための尺度として話者と聞き手の社会的距離、力関係、一定の文化の中での負荷の三つの要素があると考えられているが、その中でも負荷の変化が発話にどのような影響を及ぼすかを、教室内での会話を中心に見ていく

#### 1-1 先行研究

- ・宇佐美、嶺田（1995）、Julie Diamond（1996）の研究から話題の提示は、コミュニケーションの上での人間関係によって一定の特徴が表れることがわかる。
- 社会的距離、話者間の力関係が同じで、負荷が変化するだけで話題提示にどのような変化が生じるかを見る

#### 1-2 話題提示への着目について

- ・話題の定義一句、又は命題の形で表現される枠組みで、その枠組みの情報が関係づけられるもの又はその枠組み内に命題が当てはまるもの場合を（テーマと）言う。（メイナード 1992）

### 2 データ

- ・クラスを同じくする大学院生約15名の教室内での会話。
  - 1) 授業中の小グループでの話し合い
    - ー論文を読みながら、3、4人のグループで話し合う。グループごとにレポーターが一人参加。
  - 2) 全体での話し合い
    - ー発表者が一人いて全員がその発表内容について意見を言うことができる。参加者は同学年の15人。教師はいない。
  - 3) 授業中の全体での話し合い
    - ー発表者が一人いて全員がその発表内容について意見を言うことができる。参加者は同学年の15人。教師も参加。
- ・発話意識に関するアンケート（小グループでの活動、クラス全体での活動によって発話に対する意識はどのように異なるか）
- ・インタビュー

### 3 分析方法

#### 3-1 各話題間の関係

2つの次元からなる各話題間の関係を規定—村上、熊取谷（1995）

##### 話題の提示方法

- ・断絶型—先行する話題の終わりに明確な終結部があり、次の話題開始までに間がある
- ・割り込み型—先行する話題の会話継続中に、会話参加者が急に話順をとって後続する話題を提示する
- ・継続型—先行する話題の終了後すぐに次の話題に移行

##### 話題の内容的なつながり

- ・新出型—先行の話題の中で、全く言及されていなかったことが後続の話題になる
- ・派生型—先行の話題で言及された事柄から話題が選ばれ、導入される
- ・再生型—隣接した話題では新出型に見えるが、実はそれ以前に語られた話題が再度表れている

#### 3-2 会話の場面によって話題提示者はどのような役割をもつか

発表者であるか否か、教室での話か否か、教師がその場にいるか否か、話の対象となったものに対する知識についてどのように目されているか、といった場面によって変化する話者間の関係に注目

#### 3-3 場面によって話題提示をどのような方法で行うか

話題の変化を示す標識

メタ言語表現による標識

これらを各場面で比較し、参加者へのアンケート、インタビューで得た、意識との比較をする

### 4 結果

#### 4-1 各話題間の関係

- ・3) では派生型の話題提示が1つの中心となる話題に対して何度も生じるが、派生した話題の間関係がなく、派生した話題から更に派生は生じないが、1) では派生から更に派生へと話題が変化していく。（資料1参照）2)でも、3)程顕著ではないが、派生から派生が産まれる頻度は少なく、産まれても、元の話題に戻るまでの時間が短い。  
例えばこの場合は、小グループでは派生からの派生が二度続いているが、大グループでは派生は常に副詞の日英比較というメインとなる話題から生じており、第一の派生、擬音語擬態語との関係という話題が終了したうえで、第二の派生が生じている。話題間の関係は断絶新出型に分類される。

→人数が増えると話の流れを明らかにするために、話の中心人物が言及していないことを話題にするのを避ける。

3) の様に力の大きい存在が加わると、話の流れに配慮する傾向は更に強くなり、中心となる話題（レポート）から大きくそれて話題展開が生じることがない。

- ・ 3) では割り込み型による派生はないが、1) では割り込み型による派生が生じる。その中には話題の始まりの標識が表れないことがあり、このように話題が提示された場合は少し会話がなされると話題が元に戻る（資料2）
- ・ 3) ではある話者の発話の終了がはっきりするまで次の話者は話を始めず、話の終了をはっきりと提示しない限り、他の者が発話するまでには約10秒というポーズが開く  
例) 質問：「～ですか?」、「以上です」

発話中の言いよどみとは明らかに異なる長いポーズ

しかし1) ではわずかなポーズで別の話者が話を始める

→3) では話題間の相互的つながりは断絶の型が多いが、1) では特に断絶型が多いといった顕著な特徴はない

#### 4-2 話題提示の標識

- ・ 1) では話題の変化を示す標識が表れるのに対して、3) では質問以外の発言をする場合には、メタ言語表現が新しい話題の前に生じる。

例) 「あの、何か、私も全然Aさんが焦点としていることとずれるのかもしれないけど」

「あのーいま、××についての説明があったんですけども・・・私がいまい知らないせいかもしれないんですけども」

2) では1) と同様の標識が表れる

例) 「あのー」、「何か」

#### 4-3 話題提示者の特徴

- ・ 3) では新出型の話題提示は教師、発表者のみにより、2) でも発表者以外は、派生型の話題提示しか行わない。（主に話を進めていく人がはっきりしている）
- ・ 3) では発表者や教師による質問への応答以外は、発話と話題提起が重なる

#### 4-4 アンケート、インタビューから

- ・ 1) では話の流れにあまりかまわず思ったことを発言するのに対し、3) では全体の流れに合っている場合にのみ発話する（「グループ活動の際と比べて全員での話し合いで気をつけることは何か」という自由形式のアンケートで、ほぼ全員が言及）
- ・ 1) ではレポーターは小グループ内での参加者のできるだけ多くの発話を期待する一方、3) の発表者、発話者は自分の発話が完全に終了しない限り他の人が話すことを期待し

ない

→3) では一度ターンをとったらまとまりのある話をする事が求められる

1) では発言者が発話内容をまとめることができなくても、グループ内の者に話をゆずることができ、まとまった話をする事よりも、全員が話に参加することが求められる (小グループではグループ全員の参加を促すという点は、「グループ内のレポーターになったときどのようなことに気をつけるか」という自由形式のアンケートにはほぼ全員が言及している)

### 5 考察

話者間の力の差は、なくても、2)、3)のように人数が多い所で話すといった負荷が大きくなると、話題提示者は現在話題になっている事柄について一定量の知識を持ち、まとまった意見を言うことができると他ともに認めた人物であることが求められる。

まとまった話をする事が求められるという暗黙の了解のもとで、発話するという事は、3)のメタ言語表現とは異なり、話者は話題の本筋からあまりずれていない、自分は無知ではないと感じている。特殊な標識をつけることで、自分の提示した話題をより明らかにし、他の参加者の注意を引くことで、話題への無関心を防ごうとしているのではないか。

### 主な参考文献

- ・宇佐美 まゆみ・嶺田 明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」【日本語学・日本語教育論集】2 名古屋学院大学留学生別科
- ・岡本 能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」【日本語学】16-3明治書院
- ・杉戸 清樹 (1989) 「言語行動についてのきまりことば」【日本語学】8-12 明治書院
- ・泉子・K・メイナード (1992) 「会話分析」くろしを出版
- ・茂呂 雄二 (1991) 「教室談話の構造」【日本語学】10-10明治書院
- ・村上 恵、熊取谷 哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」【表現研究】62
- ・Brown & Levinson (1987) "Politeness: Some Universals in language usage" Cambridge University Press
- ・George Pathas (1995) "Conversation Analysis —The Study of Talk - in - Interaction—" sage publications
- ・Julie Diamond (1996) "Status and Power in Verbal Interaction—A Study of Discourse in a Close-Knit Social Network—" John Benjamins B. V.
- ・Shoko Ikuta (1983) ' Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse' "Language Sciences" Vol. 5 N.1

### 資料1a

#### 副詞の日英比較

擬態語擬音語と副詞の関係

副詞の評価性

### 資料1b

本の説明

本の説明

作者について

調査手法について

フィールドワークの説明

作者の立場について

背景について

調査との比較

エスノグラフィーの見る範囲